

世界理解月間にちなんで 「のしろ日本語学習会」

2010年 2月19日
能代ロータリークラブ

会長の時間（塚本真一会長）

今月は世界理解月間です。普段仕事と家庭に追われていては中々考えないテーマであります。ロータリーの友2月号に掲載されておりましたが「平和と紛争の解決」、「貧困と飢餓」、「教育と保健」の3つは世界の問題を考える上で大きな課題です。

ロータリーは直接政治的問題に関わらない決まりですが、飢餓救済や学生交換にしろ側面では世界各地で問題解決のプロジェクトに取り組んでいる事をご存知のとおりかと思えます。先々週の世界奉仕委員会のスピーチで塚本(修)会員から説明のあったポリオ撲滅のための「ペットボトルキャップ回収運動」も2450地区が取り組むその一つです。資金の拠出をすれば手っ取り早いのですが、敢えて手のかかる回収運動に取り組むのは私たちの意識付けと広く社会に知ってもらう手段と考えますのでご協力をお願いします。

世界理解に関連して来月は識字率向上月間であり、成田会員は地区の担当委員でもあります。日本で今さら識字率向上でも無かろうと考えていたのですが、実は身近なところにその問題があるのです。今日は能代日本語学習会代表の北川裕子様にお出でいただいて後ほどスピーチを戴きますが、海外から様々な事情で我国のこの地域に住まいながら、その問題に突き当たっている人たちに永年にわたってお手伝いをして戴いているのであります。

私の小学生の子どもの仲間にも外国から来た子もおりますが、ただラジオ体操でもクラブ活動でも日本の子どもと普通に遊んだり活動をしている光景を見ます。子どもの順応性と言ってしまうとそれまでですが、実はこれは普通ではないのかもしれない。最近、テレビ等で、「のしろ日本語学習会」の活動が大きく報道されるようになり、陰での支援や教育があって初めてこうして当り前に暮らしているのかな？と最近考えるようになりました。北川先生にはその辺のお話もしていただけるとのことで楽しみにしたいと存じます。

ゲストスピーチ（のしろ日本語学習会・北川裕代表）

能代で初めて支援のお金をもらったのがロータリーで、ありがたいし、励みになっています。

昨年9月、NHKテレビで能代教室を題材にして「生きるための あいうえお教室」が全国放送され、大きな話題になり、NHK教育部門のアーカイブ番組に選ばれました。これは、能代高校放送部がNHK放送コンクールに参加し、秋田県で最優秀賞をもらったことによるものが、NHKの目にとまったのがきっかけでした。

番組を見た読売新聞本社が取材に来て、国際化の進む日本で全国的に先進的な取り組みをしている地域として3カ所選ばれた中のひとつになりました。3月以降に連載で載ります。

能代の取り組み姿勢は20年前と何ら変わっていません。しかし、いかに先駆的な取り組みだったのか、改めて知らされています。外国人を疎外し、かわいそうな人たちと見るのではなく、生きていく人たちと考える人がいなかったことが原因だと思います。



ほかの地域に行くと、もっと行政はお金をかけて支援しています。それなのに、教室には学びに来る受講生がいないという現実があります。もちろん、試験に受かる受講生は皆無です。県内で高校や大学に入ることができたのは能代だけです。

能代高校の生徒たちが、インターネット新聞に「能代に能代教室があることを誇りに思います」と書いてくれました。

今日は、子供の日本語支援の問題を少し話したいと思います。

子供への学習言語支援は10年ぐらい前から行っています。当時の教育長の時は、残念ながら外国籍の子供の教育に関して一切支援してもらえませんでした。ですから、今でもそうですが、能代では子供の日本語支援はすべてボランティアです。

唯一、子供の日本語支援にお金をかけてくれるのは藤里町です。教育長は「言葉のわからない子供が来たとき、学校は対応できない。その子供を学校が受け入れるなら日本語を支援しなくては教室で生きてはいけない。たった1人の子供を救う意識がなくては真の教育はできない」と言って、10年前に来日した子供のために予算を付けて支援しています。現在、5人目の子供が在籍し、私は非常勤講師と総合コーディネーターとしてかかわっています。

なぜ、支援が必要か。まず、連れ子と言われる子供は、母国の言語で学んでいた経験があります。日本の学校との違いで戸惑います。

向こうの学校が入学式が10月です。3月に能代に来たとき、たとえば3年生だった子供は5カ月3年生をした時点で、4年生になってしまいます。そこで1年間学ばないまま進級するという現実があります。ここは、私のような肩書きのない人間が、ある意味で学校と戦わなければ理解してもらえませんでした。今の能代市の神馬教育長は最初から聞く耳を持っていましたので、私が関わることのできる学校の生徒は救われます。しかし、今もって、その間違いに気づかない学校が多いのです。

日本で生まれ、国籍が日本の子どもの言語に関してですが、生まれた子供に積極的に関わり、母親がきちんとした日本語を話せないことに理解を示し、協力的な家族の中に生まれた子供は日本語を話す機会に恵まれます。しかし、頼りが夫だけだとか、家族がいない場合、たとえ国籍が日本であっても子供の言語能力は極点に低いと言うことが証明されています。

子供を産んで5カ月ぐらいで教室に子供を連れてきます。見えるんですね、おしめを替えるとき、母国語で語る母親、「いない、いない、バー」が「パー」になる母親。「アップアップ」の意味が分からず、上に上げる母親。幼稚園や保育所で学ぶ当たり前のことが理解できず、子供に何も答えられない母親の苦悩が。子供と親のコミュニケーションもとれなくなるのです。

しかし、苦悩する親は救われます。今の教育は、家庭や母親へ教育の責任を重視する傾向があります。しかし、これからの国際化社会を考えるなら、外国籍の母親を持つ子供は何を足がかりに教育を受けろと言うのでしょうか。

学校に入れたら子供は自然に覚えるとか、親がきちんと教育をするべき、日本語支援はボランティアに任せておけばいいという時代ではありません。

なぜなら、地域における外国籍住民は遊びや交流の住民ではなく、私たちと生きていく人たち、そして子供はこの町を支えていく市民として育てなくては町が崩壊すると思います。

生まれたときから親とともに軽蔑され、信じてもらえず、学校で疎外され、進学もできなかった子供たちの行く末が、今の東京に住む外国人たちです。刑務所の8割が外国人だそうです。地域で生まれ育った子供が、大人になるという視点が、町にも学校にも欠落しています。

これを全国で訴えているのが、今の私の大学や地域での講演内容です。能代で話させてもらえませんが。

きっと10年後に、この問題は論議され、事件が起きることで表面化していくと思います。私が今かかわっている子供たちだけでも、事件を起こし破滅する人生を歩ませたくない。それが、能代でボランティアで続けている理由です。

教室がなくなったら、教室が町の中でどれほど大切な場所だったか理解してもらえらると思います。たくさんの子供たちの涙と苦しみに寄り添ってきました。



大人への日本語支援は、能代が全国で一番やっている。子供の支援がこれからの課題です。

日本語支援のボランティアは、それがまちづくりだと思うから続けられる。日本語教室で学んで大学まで進んだ子供が「私は能代に来てよかった。いつか、能代に恩返しをしたい」と言います。小さいことの積み重ねが、そういうことを言わせるのだ。私たちがやっていることは小さなことではないのだと思います。

外国の人とどうかかわっていくかというのは、まちづくりの基盤となります。教室の生徒は盆踊りで地域の人と話すことができる。能代の人というのは、本当は優しいんです。一見びびりますが。ジャスコで買い物をしていて困っている外国人を手助けしてくれているのです。

ロータリーは最初から、私たちを応援してくれた。それに私たちは答えなくてはいけないと思います。これからも頑張ります。